

中村幸彦著述集

第十四卷

©一九八三

中村幸彦著述集 第十四卷

定価七〇〇円

昭和五十八年三月二十日印刷

昭和五十八年三月三十日発行

著者 中村 幸彦

発行者 高 梨 茂

印刷者 青 木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三三四

検印廃止

中村幸彦著述集

第十四卷

書誌聚談

目次

一 書誌学雑談

- 1 日本書目史の課題 (九)
- 2 近世地方版研究の提唱 (二四)

二 本のはなし

- 1 回想この一冊 (童子問) (八七)
- 2 古義堂文庫展覧会 (九〇)
- 3 駿台雑話など (九六)
- 4 亀門の学風―『亀井南冥全集』刊行によせて (一〇〇)
- 5 洗心亭詩稿 付「女性の日記」 (一〇三)
- 6 近世の軍記物―『英草紙』を注して寸感 (一〇九)
- 7 二つの島原もの (一一一)
- 8 銜売女色の道 (一二三)
- 9 二、三浮世草紙の刊年 (一二七)
- 3 近世の読者 (三六)
- 4 擬作論 (六六)
- 10 傾城手管三味線の成立年代 (一二)
- 11 大東急記 洒落本の書入 (二三四)
- 12 洒落本おっかぶせの弁 (一三六)
- 13 洒落本の作者 (一三六)
- 14 風来山人著作考 (一四六)
- 15 一九の浮世絵と画入狂歌本 (一五〇)
- 16 太功記十段目 (一五四)
- 17 江戸時代のベストセラーズ (一五八)
- 18 「柳さくら」へんちき論 (一六二)
- 19 荷風の戯作性―三柏葉樹頭夜風にういて (一六六)

三 解題

一七二

- 1 春雨物語解題 (一七二)
- 2 狂詩狂文篇 (近世文学未刊本叢書)
解題 (一四三)
- 4 石川淳著諸国畸人伝 (中公文庫) 解
説 (一六二)

3 山口剛作「明和の一人」を読む

四 未刊随筆談

二六七

- 1 東行話説 (二六七)
- 2 大観随筆 (二七三)
- 3 世々之姿 (二六〇)
- 4 雨中の伽など (二六〇)
- 5 所聞録など (一九二)
- 6 宝曆雑録 (一九七)
- 7 盃簪録 (三〇二)
- 8 平亭銀鶏の雑記類 (三〇〇)
- 9 一簾春雨など (三三三)
- 10 とはずがたり (石川雅望) (三一九)
- 11 消夏雑識など (三四)
- 12 人熱三味湯など (三一九)
- 13 公幹先生東遊雑漫録 (三三三)
- 14 反古袋 (三四一)
- 15 恭齋備忘録 (三四七)
- 16 益軒、東涯、庭鐘の抄記 (三五〇)
- 17 愚艸 (京都の巷談集) など (三五七)
- 18 稻垣木公の寒翠楼塗説など (三六三)
- 19 帰厚録 (名公遺事など) (三六九)
- 20 于明俳行脚控 (三七五)
- 21 偽書のくさぐさ (三八二)
- 22 金華漫録など (三八七)
- 23 斎静斎の随想類 (三九二)
- 24 黒川道祐著遠碧軒随筆 (三九〇)

五 図書館と文庫

四〇四

1 肥前 島原 松平文庫紹介(抄)(四〇四)

2 天理図書館の蒐書―和漢書全般について(四三)

3 天理図書館と江戸文学(四三七)

4 古義堂遺書について(四四〇)

5 大阪天満宮の御文庫と蔵書(四五二)

付新しい図書館員

四六八

後記

四八三

書誌

四八五

〈挿画〉

相学提要

二四

おかげ中 嚙栗毛 宣伝ビラ

六

色道このてかしわ

一三

塚原山八境

三〇、三

仁斎自筆 童子問

六

ことし俵

一五

子供早学問

三

歐陽文忠公全集

六

東行話説(小林歌城本)

二九

甲官便覧

四

かた女覚帳

二〇

世々之姿

二八

万買物調方記

五

嶋評判やりくり草

一三

盞簪録(東涯本)

三〇

里見八大伝九輯広告

五

朱雀遠目鏡跡追

一三

人熱三味湯

三三、三三

太神宮御影参の宣伝ビラ

毛

異素六帖蜀山人書入

二四

恭齋備忘録

四八

雑文穿袋三馬書入

二五

寒翠楼塗説

三六

書誌聚談

一 書誌学雑談

1 日本書目史の課題

書目史の対象は勿論書目であり、書目年表の作成が、ここでの最も基礎的な操作なることという迄もない。しかしこの方面の従来成果を見るに、或は好事的或は実用本位であった為か、書目史の基礎としては十分と称し難い。このことは日本の書目史は殆ど未開拓に放置されて居りその研究は殆ど第一歩から発足しなければならぬことを意味する。

これ迄の書目の書目類が、不十分と考えられる第一は、写本で伝わる書目の捜査と研究の不足である。近世以前は勿論、印刷術の発達を見た近世においても、多くの蔵書目録、その他の書目も、写本のまま伝布し現存している。その数、けだし刊行書目の数倍乃至は十数倍に上ると想像する。これ等写本書目を度外視してなった書目年表は、間隙空白甚しく、史的考察の資には、乏しきに過る。更にこの写本の書目類の書誌学的検討は、その書目年表を、一段と豊富にするであろう。試みに川瀬一馬氏の紹介された『日本書誌学之研究』「不忍文庫書目」

についてみても、『群書類従』の分類に従った初稿の姿から、漢籍の考証学の進歩に影響された第二稿をへて、第三稿にいたる。この蒐書家屋代弘賢其人の生涯に於ける分類意識の変遷が、自ら書目史の一齣をなしている。第二に、書目と書誌の区別を撤回して、書誌の類をも思いきり、書目年表の中に加えねばならぬ。もともと書目書誌の称は便宜的なもので、本質的な相違はないと思う。今の図書館の簡略な目録にしたとて、書誌学的に正確な根拠を常に持たねばならない。書誌そのものも、好笑的学術的として許された放縦さを捨てて、図書館目録風な実用性を、本来はそなえるべきである。もし今日、この二者を本質的に区別する考えが存在するとせば、その罪は、これ迄の図書館目録記載の不完備と、学者好事家の思い上りにある。書誌の加入によって、書目年表が、一段と充実するのは、言を待たない。第三は、言わずもがなながら、各書目の書誌学的検討が、精密にほどこされなければならぬ。進んでは、散佚した書目の復原なども望ましい。刊本の存在が推量される万治の『新板書籍目録』に例をとって、観智院に蔵する写本と、『寛文書籍目録』（日本古典全集『書目書上』所収）とを比較する。されば、所収書籍が、いくつかの分類に集合され、その区別は、多く数行の空白や丁を改めることによって示されているが、その分類項目と順序は、外典（『寛文目録』では、十一の番号にあたる。以下括弧中の番号は、『寛文目録』の配列順）、神書（十二）、暦占（十三）、軍書（十四）、往来物（二十一）、医書（十五）、禪宗（七）、法相（三）、律（四）、俱舍宗（五）、天台日蓮宗（二）、浄土一向宗（八）、真言宗（六）、經（一）、歌書（十六）、連歌（十八）、俳諧（十九）、手本（二十一）、図（二十二）、和書並仮名類（十七）、舞並草子（二十一）となる。この順序をよく見るに、所に、『寛文目録』と同じ配列の部分を見出すと共に、甚しい相違も見出す。こうした事実を、万治の原本は、大体、『寛文目録』と同じ分類と順序を持っていたのであるが、万治二年十月、僧杲快が写した折、自分に必要興味ある部分から写していった、或は、杲快か後人かは不明ながら、現状の如く綴り一冊とした時、原本の順序

を重んじなかったこともあったかもしれない。若しこの推量があたれりとすれば、万治の目録の刊行と体裁が明らかとなり、近世書籍商用目録のあの分類法は、寛文を万治に迄さかのぼることが出来るのである。かくの如き考証の必要なものは余す所なく考証を終える。以上の注意と、年表作成に必要な一般考慮の下に、書目年表が、一応出来上るとする。と研究は第二段に入る。

書目とは、目的の如何を問わず、実物にふれないでも、書籍群のあり方あり様を明らかにするものである。従って、その記載態度乃至は方法が書目の本質的な性格を形成する。記載態度や方法を具体的に考えれば、一に、作成目的、二に選択範囲、三に記載様式、四に配列方法、五に記載内容等を包含する。作成目的とは、文献で見得る最古の書目、天平七年に作られたかと考えられる吉備真備のものを初め、平安初期高僧達が、将来書籍経卷等を記したことや、『享保以後 大阪出版書籍目録』が、出版や取締の控として記されたことなどを指す。多くの個人文庫の蔵書目録が整理用、図書館目録が閲覧用なものの中に入る。二に、選択範囲には、延宝四年『俳諧渡奉公』の目録が俳諧刊行書に限り、『西洋学家訳述目録』（嘉永五年）が洋書の翻訳紹介にかぎった如き内容によるものもある。又『弘法大師御作目録』や、『書籍目録作者寄』に見る、著者を選択の中心においたものもあり、『植字書目』（『弁疑書目録』の中）や『八文字屋出版書目』など出版事情を選択標準にするのもあってよい。

『嵯峨本書目』（『弁疑書目録』の中）とか『奈良絵本書目』の如く、装釘に関係したえらび方があれば、これもこの条項に入る。そして何等の選択標準を持たないことも、この条項に入れれば入る。三に、記載様式とは、今日の図書館で、書名カード著者名カードなど称されるものがここに入る。著者名、書名、冊巻数、大きさ、出版書肆、刊写の別、売価などの書籍のもつ諸性質が、どの程度に、又どんな順序、用式に記載されているかを問題とする。四に、配列方法とは、早く『日本国現在書目録』や『本朝書籍目録』の如く、ある種の分類によって集合

配列するとか、『今昔操浄瑠璃外題年鑑』（宝暦七年）の如く、その浄瑠璃が、上演された年代順にならび、そのままその浄瑠璃丸本の目録になっているとかを指す。斎藤拙堂の『鉄研斎輦軒書目』の如く分類に相当するのが地域別であったり、『和漢軍書要覧』（明和七年）の如く書籍の内容による年代順のものもある。『古物類字抄』（弘化四年）の如く五十音順、蜀山人が所持していた『田口氏所蔵丸本目録』のようにいろいろは順、『近代名家著述目録』の如く著者名のいろは順や、天和元年の『新撰書籍目録大全』に見るいろは順のうちを更に分類したようなものもある。五の記載内容とは、山岡浚明の『古ものかたり目録』のただ書名だけの箇に、所謂書誌で、『経籍訪古志』の詳、或は所収書籍の数量、一部一部の書物としての価値記載の正誤などが、この条の問題である。しかしこの諸条項の数種が、一つの書目の中に共存しているのが実状である。以上記載態度乃至方法の諸条項が、一書目に如何に存在するかを見、一々にその時代的意味を考え、書目相互の關係に諸条項の変遷を見出して、そこに歴史の理法を求めること、即ち書目史の課題であり、その間自から日本的特性を抽出して、日本書目史が体をなすにいたる。具体的な一、二の歴史的操作を、簡単に試みることにする。

元禄四年水戸藩の彰考館では、大串元善号雪瀾をして、蔵書の目録を製せしめた。即ち『彰考館総目録』である。最初にこれを取りあげるのは、この書目は『大日本史』編纂の為に書籍を利用する為のもので、これ以前の将来目録、現在目録、或は、整理用の蔵書目録とは目的を異にし、今日と同じ意味での、整った図書館目録だからである。まだ実物を寓目の機を得ないが、小宮山楓軒の『耆旧得聞』と現『彰考館目録』によって、その大体を知り得る。漢籍は八卦を以て分類し、經（乾）、史（兌）、子（離）、文（震）、類（巽）、雜（坎）、道（艮）、釈（坤）、とし、本朝の書は十二支を以て分った。即ち、神道（子）、史伝（丑）、礼義（寅）、家乗（卯）、詩文（辰）、和歌（巳）、音楽（午）、雜家（申）、抄解（酉）、仏書（戌）、稗藪（亥）である。大体日本の漢籍の分類は、『隋書經籍志』

にならった『日本国現在書目録』から後も、全く経史子集の法を出ないようである。しかしこの四部の法は、儒学中心思想の下に出来た無理と、子集の間に、今日の使用に於いてもかなりの混雑の生ずる欠陥がある。すれば、道釈に一部を新しくおこし、子集を、子文類雑の四部にわかったこの分類は、我が国漢籍分類の新機軸なると共に、元善の見識は高く評価すべきである。本朝の部の分類は、既に寛文十一年にも刊行あって、本朝古典の分類規範となっていたと思われる、『本朝書籍目録』に負う所が明らかである。がここでは、漢籍の場合とは反対に、範とした目録の二十項を十二項に簡約した。書籍の数に応じ漢籍の分類にも調和させ、実用を主眼とした改め方かと考える。分類方法の合理性精緻さを誇るもよいが、やはり実用第一とすべきであろう。時に三十四歳、元善の、編削に長じたと評された頭のよさを示している。括弧中に於ける八卦十二支は、分類記号であろうが、日本に於ける極初のものである。『群書類従』もこの分類を若干は参考にしたであろうか。そして『類従』の目録は、海外の分類法が入る迄、弘く用いられ、参考にされたものであるに思いをいたせば、『彰考館総目録』の歴史性を知り得るであろう。分類の変遷が、時代を最もよく反映した例に、近世書籍商用に出刊した書籍目録の分類の変化がある。今、寛文、延宝、貞享、元禄、享保、宝暦、明和に享和の『合類書籍目録大全』の分類の表を比較する。寛文の目録に、十七和書並仮名類の一項に収められたものが、延宝に入ると、仮名仏書、仮名和書、謡本、算書、盤上書、茶湯書並華書、膳方書並料理書の七項目にわかれる。この変化を見ながら、筆者の頭には、ふと西鶴の『好色一代男』巻五に、名妓吉野の教養の深さをたたえた一文がうかんだ。いう、

昔しを今に一ふしをうたへばきえ入斗、琴弾歌をよみ、茶はしほらしくたてなし、花を生替土圭を仕懸なをし、娘子達の髪をなで付、碁のお相手になり、笙を吹、無常咄し内證事、万人さまの気をとる事ぞかし

と。何と七項目と、殆ど同じなのに一驚する。史家は近世初期を、啓蒙時代町人教養の時代と称するが、その教

養の内容を何よりも、浮世草子と共に書籍目録の変遷が如実に示している。貞享、元禄となれば、好色本の項の出現、儒書の部分が七項目に増加して、元禄文化の性質を物語り、享保学界の百科事彙的風潮や、文人趣味の流行は、宝暦の目録のその部分の項目の新出が、鋭敏に反映している。更に興味のあるのは、享和の書目は、国史、神書の項が巻頭に出て、明治維新を前にした、国家意識の高揚を示す。

その他記載様式にあって、著者名の記入が甚だ不活潑で、日本出来の書物についての著者名目録の如きは近世の個性の自覚につれて実現した。実状は、森銑三氏の『近代名家著述目録』についての研究がある。この優秀な『近代名家著述目録』が、学者の手によらず、主として、万笈堂、仙鶴堂等本屋の頭と手によったことは、日本の学問方法の今もなおその残滓をのこす非科学性なども考え合せられて、書目史の好問題であろう。

兎も角日本書目史には、なすべく考えるべき事々が余りにも多い。ただ思いつきの一端を述べて今後の開発を期待する。

2 近世地方版研究の提唱

もう十年も以前のことである。九州大学文学部国史研究室から、一枚刷類を一括取り出して、私は眺めていた。皆幕末から明治初期へかけての、間引禁止の為の刷物である。多いのは鬼の顔に成った母親が、乳呑子を扼殺している図の入ったもの、原図らしいものから、次第に変化して、文字も図柄も、そして印刷自体が素人の手になったらしく、様々のものがある。天明の頃、下野黒羽藩の鈴木為蝶軒が、かかる図を製して